

千三百年の時の流れの中で

埼玉県さいたま市 木野田 博彦

平成最後の年の四月九日、桜の花もおおかた散り終えた頃、母は静かに旅立って行った。九十歳であった。その後空き家となつてしまつた埼玉県大宮の実家も三年経ち、人手に渡ることとなつてしまつた。ともかくきれいな状態しておかなければならないため、連日実家に通い処分するもの、取っておくものの仕分けに追われた。母も、二十年前に亡くなつた父も、とにかく物をきちんと取っておく人であり、その量は膨大であつた。しかし結局は多くを処分することにした。

処分できなかつたものの中には、母が趣味で始めた絵手紙と写真があつた。父に先立たれてからは、母は鬱状態に陥り、自分で何とかしなければと思つたのか、絵手紙、写真に没頭していた時期があつた。私も母が落ち込まないようにと、十年間ほどに渡り週に一度は母を誘つて関東一円を日帰りのドライブ旅行に連れ出してあげた。母の幸せそうな笑顔が見られて、私も嬉しかったからだ。写真はその際撮つた風景写真が中心であつた。しかし、母には悪いが、人物が写っていないものはそのまま処分した。

絵手紙は、そのまま取っておくことにした。多くは庭先の草花を描いたものであつたが、故郷の浜辺とサザエを描いたものもあつた。そしてその絵には、「故郷の潮の遠鳴りが恋しいです」

という、言葉も添えられていた。

母の故郷は、千葉県の勝浦市である。昭和三年に勝浦で生まれた母は、生まれて間もなく同じ勝浦町内の家に養女として迎へられ、戦前から戦後にかけて、少女時代を勝浦で過ごすことになつた。しかし養女ということ、辛い思いも多かつたのであろうか、養父母、とりわけ養母に対しては複雑な感情を抱いていたようである。しかし故郷、勝浦に対しては深い愛情があつたようで、時折幼い日の思い出を語つてくれたことがあつた。

だから母との日帰り旅行では、今日は千葉に行こう、というとき殊の外嬉しそうであつた。

千葉県は埼玉県とは隣接しているものの、房総の海を訪ねるためのドライブは、結構大変であつた。以前は高速網も整備が途中で、勝浦や館山に行くときは、大宮から国道16号で千葉市内に入り、そこから市原市内に入り、別ルートを使い勝浦方面に向かうという行き方をした。千葉市内は車が渋滞することが多く、千葉を抜けた後、市原で休憩したり、見学するということも多かつた。

市原に立ち寄つたある時、たまたま近くに万葉集東歌の歌碑があるということを知り、そこに行つてみたいと思つた。田畑に面した静かな森の中に、阿須波（あすわ）神社という小さな祠（ほこら）があり、そこに万葉歌碑があつた。「庭中（にわなか）乃（な）阿須波（あすは）の神に小柴さし 吾は斎（いは）はむ 帰り来（く）まで」という詠み人知らずの一首が刻まれていた。歌の意味は「庭の中にまつられている阿須波の神様に小枝をさして、わたしは祈ります。どうかあなたが無事に帰つて来られますように」という

ものである。九州大宰府に防人として市原を去る男性に向けて歌われた歌である。おそらく愛する夫、あるいは恋人を思い、贈った歌なのであろう。千三百年近くも前、奈良時代に市原の地で作られた歌であるという。東歌にしては珍しく、その歌が上総の国の防人ワカオミベノモロヒトという男性に贈られたという、贈られた人物名が分かっている。しかしその男が、その後どうなったのか、無事に市原の地に帰ってくる事ができたのかはわからない。

万葉集には実に四千五百首もの歌が収められているという、その中には柿本人麻呂や額田王、山上憶良、大伴家持といった有名な歌人の作った歌が名歌として収められている。同時に、詠み人知らずの防人歌や東歌といった庶民の歌も収められている。そのような中であって、市原の地で出会った歌は、おそらく奈良の都の人たちから見れば、取り立てて優れた歌として万葉集に収められたというわけではないのかもしれない。しかし、夫、あるいは恋人への切なる思い、心情、深い愛情が率直に感じられ、私には素晴らしい歌に感じられた。

奈良時代、大和の国の朝廷から見れば、東国上総の国は、未開の地、野蛮な地としてみていたのであろう。そしてそこに住む住人は、大和政権の基盤を確立し、中国の唐や朝鮮の新羅などの国に屈しない独立国としての地位を護るため、悪く言えば隸従された、利用される側の存在だったのであろう。防人として上総の国市原の地から、九州は筑前の国大宰府までの旅路は、現在の私たちの想像以上に危険極まりない、永遠の別れをも意味するもので

あったと思う。

同じ東歌には、おそらく防人として、あるいは都の造成に駆り出され旅立つと思われる夫に対し、その旅路を心配するこんな歌がある。

「信濃路は今の墾道（はりみち）刈株（かりばね）に足踏ましまむ 沓（くつ）はけわが背」という歌である。

意味は、「信濃路は、新しく開墾したばかりの道で、切り株を馬の脚でお踏みになってはいけません。靴をお履きください、我が夫よ。」という意味である。市原で出会った歌同様、旅立つ夫を心配する妻の率直な思いが伝わられた歌であると思う。

私の住む埼玉県には東歌としてこのような歌がある。
「埼玉（さきたま）の津にある船の風を痛み綱はたゆとも言な絶えそね」という歌である。

意味は、「埼玉の津につないである船の舳い綱（もやいづな）が、風が激しくて切れるようなことがあっても、あなたからの便りは絶えないでください」という歌である。

埼玉（さきたま）とは県名のもととなった、行田市埼玉の地のことであり、現在も残る地名である。埼玉の地には、埼玉神社や埼玉古墳群もあり、私にとっては何度も足を運んだお馴染みの場所である。その埼玉の地から比較的近くを利根川が流れており、埼玉の津とは利根川を利用した水上交通としての船着き場であったのであろうか、私にはこの歌にも、何か市原の歌や信濃路の歌と同種、男と女との悲しい別れ、防人として旅立つ男性への切実な思いが込められていると感じる。

それにしてもこれらの東歌はどのようにして万葉集の中に収められることとなったのであろうか。いったいどの誰がいつの時点で創作したのであろうか。一説によると東歌やそのほか万葉集に収められている歌には、節がついていて、民謡あるいは労働歌として歌われていたともいう。いったいどのようなメロディーであったのだろうか。いやその前に当時の東人の暮らしぶりほどのようなものであったのだろうか。私は残念ながら何もわからないのである。

当時の東国において、おそらく血なまぐさい争乱もあったと思われるが、私の心の中の東国は、貧しいながら人々は生きるために助け合い、男女は愛し合い、日々それなりに幸せに過ごしていたように思われる。東歌の中には悲しい別れの歌もあるが、多くは大らかな恋の歌が多い。それらは技巧的には劣るが素朴で純朴な歌が多い。

しかし日本が中央集権的な国家へと歩んでいく過程で、東国はその影響を大きく受けるようになり、その暮らしぶりは変わっていったのであろう。万葉集東歌は、そのような変革の時代に作られたものと思われる。

当時の東人は、華やかな都の人たちをどのように見ていたのだろうか、おそらく無慈悲に大切な働き手を奪い去っていく権力者に対し、複雑な感情を抱いていたはずである。しかしこの三つの歌にはそういった恨み言は一切感じられない。千三百年という時の流れが、権力者を恨むという感情を消し去り、美しくも哀しい恋の歌として、夜空に輝く星のように、今も美しくきらめくもの

となつていくように感じる。

偉大な万葉集が編纂された後、古今集や新古今集などの和歌集が編纂される。しかしそこにはもう、詠み人知らずの東歌は登場しない。そこに登場するのはあでやかで、みやびな宮廷歌人など、選ばれた人たちの洗練された歌である。技巧を凝らした優美な歌であるが、私には万葉集に歌われた歌の素朴な人々の心情が感じられず、何か物足りなさを感じるのである。

万葉集の後も東国の庶民は、日々の生活の中での、喜び、悲しみ、苦しさを歌として残していったはずである。おそらくその数は膨大な数であるはずである。しかしながら今知ることができるのは、ごく限られた数だけである。その中でも市原の歌、防人に取られた愛する男性への無事を願う女性の歌、阿須波の神に頼ることしかできなかった切実な願いのこもった歌は美しい。いつの時代も男女の愛情は美しいものである。

かつて市原の地に、愛する人を感じる女性が存在し、その思いを歌にし、その歌が奇跡的に万葉集の編者、大伴家持らのもとに辿り着き、万葉集に取り入れられ、千三百年の時を経過した現在にも伝えられたという奇跡、実に不思議な、歴史のロマンを感じる。

ところで、防人として旅立った男性は、その後どうしたのであろうか、市原の地から福岡の大宰府まではあまりにも遠い。交通の発達した現在においても遠い地である。当時の人にとっては遙か彼方の遠い異国の地であったはずである。そのような場所に男はおそらく馬もあてがってもらえず、おそらく徒歩で、古代の荒れた道、山道を何日もかけて旅したのであろう。または海に近い

市原の地のことを考えると、市原の港から、船に乗り、途中各港に立ち寄りながら旅したのかもしれない。それは命がけの旅であつたはずである。もしかしたら旅の途中で、または大宰府の地で命を落としたのかもしれない。命を落とさなかったにしても、無事に市原の地に戻り、帰りを待つ愛する女性のもとに帰ることができたという確率はかなり低いと思う。男は旅の途中、あるいは大宰府の地で何を思い、どのように日々過ごしたのであるうか。今となっては知るすべがない。

一方女性には男がない間、どのように日々過ごしていたのだろうか。男の間には子供もいたのだろうか。当時の東国はまだ貨幣経済など行き届いていない時代である。大事な働き手を失い、女性が生きるために必死で働いたのであるうか。それは農作業であるうか、それとも漁業に従事したのであるうか。そして日々どのような思いで過ごしたのであるうか。携帯はもちろん、郵便の制度もない時代である。女性はただひたすら、阿須波の神に祈るしかなかったのであるうか。そして結局は男と再会するという夢は叶わなかったに違いない。しかし、男性に対してと同様、今となっては知るすべがないのである。

しかし、普通に考えれば、この女性は愛する人を突然奪われた悲劇の女性ではあるが、本当に可哀そうな、哀れな存在だったのであるうか。私には一概にそう決めつけられない気がするのだから。女性はただひたすら、藁にもすがる思いで阿須波の神に願いをかけていた。それだけ男性と過ごした時が美しく、幸せな時だったからであるうか。その期間は短かつたかもしれないが、人生の中

でこの人と思う人に巡り会うことができたこの女性は、幸せな人だったのかもしれないと思いたい。

市原の、名前も知らない女性について思いを巡らしていたら、千葉で生まれ、千葉の海を愛していた母のことが思い出された。母は戦前から戦後にかけて、生まれてから十代の多感な少女の時期を勝浦で過ごした。先にも記したように、母は養女として育てられたこと、また美しく輝ける多感な少女時代が戦時中であつたこともあり、あまり昔のことを語らなかつた。同時に私もあえて聞き出そうとはしなかつた。しかし幼い日、学芸会で主役のかぐや姫の役に抜擢されたこと、戦前に町内にカフェという名前のレストランがあり、いつも東海林太郎のレコードが流れていたこと、彫刻家高村光雲が旅の宿として宿泊したということなどを嬉しそうに話してくれたことがあつた。私はそれらの断片的な思ひ出話を聞き、母は母なりに幸せだつたのだと思つた。

戦後母は勝浦から東京に出てきて父と出会い結婚し、やがて埼玉に移り住むこととなつた。私は戦後の一時期、母がどのように過ごしていたのかについて、ほとんど知ることができなかった。そしてその後、母は埼玉で人生の3分の2に当たる期間を過ごすこととなる。生活するうえで何の不便さもない埼玉ではあるが、母にとつての終生の大切な故郷は海のある千葉県勝浦であつた。母が生きているうちに、もつともつと故郷の話を書いておけばよかったと今になって思うのである。

平成の終わる少し前に亡くなった母。あれから間もなく丸4年になろうとしている。未だ新型コロナウイルスは、日本から姿を

消すことなく、日々陰鬱になるニュースが報道されている。加えて自殺者も増加傾向であり、悲しく凄惨な事件も多く、何か晴れ晴れとしない日々が続いている。二度目の華々しい大会を期待していた東京オリンピックも、無観客のさみしい大会となってしまった。しかしそのような中でも、人は日々笑い、楽しみ、時に悲しみ、様々な思いをもって生きている。それらの人々の大多数の思いは、やがては何も残らずに消えていってしまうものだと思う。母の思いもやがては誰にも語られることなく消えていってしまふに違いない。しかし本当にそうなのであるうか、地球という星の日本という、決して大きくはない島国で偶然生まれ、生き抜き、やがて死んでいく多くの人々の思いは、決して消え去ることなく、日本の土の中に、あるいは草花、樹木の中に、あるいはそよ風の中に、そして夜空に瞬く星々の中に、魂として宿っていくような気がしてならない。

奇跡的に万葉集の中に収められた、阿須波の神に祈りを捧げた市原の女性の思いも、夜空に瞬く美しい星として、今も地上にかすかな光を送ってくれているような気がするのである。私はそのような日本に生まれてきてよかつたと思う。私もいつかは、市原の女性や私の母、そして多くの人々と同じ夜空の星となることができるように、人間としての様々な感情を大切に、今というこの時をしっかりと生きていきたい。

「庭中乃 阿須波の神に小柴差し

吾は斎（いは）はむ 帰り来までに」

市原の地で、美しいこの歌に出会えて本当に良かったと思っ
ている。

— 終わり —